



こはら・かつひろ 1965年、大阪生まれ。同志社大大学院神学研究科博士課程修了。博士(神学)。現在、同志社大神学部助教授。昨年12月に設立した「宗教倫理学会」の事務局長。共著に「E U世界を読む」「性の意味」「生と死」などがある。

遺伝管理社会にひそむ影

先日ある授業で、第二次世界大戦中のナチス・ドイツの政策を理解してもらうため、映画「地獄に墮ちた勇者ども」(ヒスコンティ監督、一九六九年)の一部を見もらった。この映画は、人間の欲望がどのように狂気へと変貌していくかを描いた名作の誉れ高い作品であるが、授業後の感想の中に次のような意見があった。「結婚の誓いの中で、家系に遺伝病があるかどうかを聞く時代があったなんて、信じられませんでした」。

ナチス時代、遺伝学的な健全さが、ある種の「聖性」を演出

していた。それがナチ式の結婚式の中にも反映されていたにすぎないが、この問題は、先の学生が発したような懐古的な驚きを超えて、近未来社会のカリカチュア(戯画)としての役割すら果たしている。

■技術的な領域に

ごく最近を振り返っても、遺伝子をキーワードとする生殖医療の話題に事欠かない。五月初旬、米国で両親以外の第三者の遺伝子を持つ「遺伝子改変ベビー」の報道があり、中旬には、わが国で初めての「代理母」出

産の報道が続いた。両者の事例から多くのことを考えさせられる。

高度な技術は「諸刃の剣」に

まず、いずれの場合も、「産みたい」という欲求を技術が強力にサポートしている。かつて出産は人間がどうすることもでき

きない、自然や神仏に委ねざるを得ない領域であった。子宝に恵まれること、安産を祈願することは「宗教的な領域」に属していた。しかし、今日では出産は、人間が管理・制御することのできる「技術的な領域」へと急速に移行している。制御する点に関して、「遺伝子改変ベビー」は不妊治療を超える側面を明らかに持っている。「良質な」卵子の細胞質を注入することによって卵子の受精能力を高めようとする試みは、その安全性が疑問視されているだけではない。生殖細胞への遺伝子治療が許容されるにつれ、身体能力や知能にすぐれた「良質な」子を産む、といった優生学的な人間改造につながっていく可能性がそこには潜在している。

倫理的に議論の尽くされていない技術の利用は、ますます進むだろう。その際、その行為を正当化する常套句は次のようなものである。「純粋な気持ちで患者が希望しているのだから、使える技術を用いずに患者を見捨てることはできない」。人々の欲求はいかなる市場をも生み出す。それが資本主義社会の原理であり、クローン人間作製サーブिसに世界中から顧客が集まるのも、その一例である。

■価値観の形成を

イギリスでは、ある遺伝病の患者に対しては保険の契約が拒否されたり、保険料が引き上げられたりしている。就職前や結婚前に、遺伝情報が一つの判断基準として用いられる時代が、そう遠くないことを予感させる出来事である。遺伝管理社会は、すぐ足下に到来している。それは、生命の基底部分が「情報」として流通する情報化社会でもある。「切実な願い」「小さな善意」が集積した果てに狂気が生み出されていった数々の歴史は、われわれに何を教えるのだろうか。

高度な技術はすべて諸刃の剣であると言ってよい。それを認識するためには、市民社会に根ざした科学教育・倫理教育が必要であるだけでなく、文系・理系の峻別といった悪習を克服する価値観の形成が求められる。時には、古い・病い・障害と折り合いをつけながら生き続けることの意味を教えてくれるような、いにしへの知恵に耳を傾けながら、「進歩」「発展」が強いるストレスから自由になってみる必要があるのではなからうか。

提言

オピニオン 解説